スーパー 超ナビ

# 国語 第1回

一

(2) AとDは、「かろ／かっ・く／い／い／けれ／○」と活用する**形容詞**。形容詞は、物事の性質や状態を表す語で、**言い切った形(終止形)が「い」で終わる**。Aの終止形は「**多い**」、Dの終止形は「**面白い**」。Bは、活用せず、用言(ここでは「移動し」)を修飾しているので**副詞**。Cは、活用せず、体言(ここでは「野望」)を修飾しているので**連体詞**。Eは「ら・ろ／り・っ／る／る／れ／れ」と活用する**動詞**。動詞は、**言い切った形(終止形)がウ段の音で終わる**。Eの終止形は「**なる**」。

(3) 1の段落の「**もともと**オオバコの種子が持つ**粘着物質**は、**乾燥などから種子を保護するためのもの**」という部分に「**本来の機能**」が述べられている。

(4) 「**逆境**」のように思われるのは、「**踏まれること**」である。オオバコは、「踏まれなければ困るほどまでに、踏まれることを利用している」ので、「**踏まれること**」という「**逆境**」を逆に「プラスに変えている」といえる。ここでの「**プラス**」とは、人や車に踏まれることで**分布を広げていくことができるという点**である。

(5) 抜けている一文の「**そんな一か八か**」が、**どんな内容を指しているのか**を考える。「一か八か」とは、①**結果はどうなろうと、運を天に任せてやってみる**ことである。また、それを実現するためには、②**「種子をたくさん作って、散布する」必要がある**。さらに、③**子孫と「その場所で幸せに暮ら」すこととは異なる**ことである。①～③を満たす内容を探すと、6の段落に書かれている、移動先で「無事に生育できる可能性は小さい」のに**「わざわざ別の場所に種子」を移動させること**が見つかる。

(6) 7の段落に「**それ**が～**種子散布をする理由**である」とあるので、その前の**「環境」の「変化」に関すること**が、一つ目の理由である。また、3つあとの段落に「**さらに～理由**は、**他にもある**」とある。その後に書かれている**親植物からできるだけ離れる必要があること**が、二つ目の理由である。

二

(1) ――線1の主語は、**飛脚がかごに乗り、かごかきがこれをかついで、茶屋まで行った**ことから、**飛脚とかごかき**。――線2の主語は、「それなら降りよう」と言ったのは、**かごを降り、かごかきと一緒に走った人物**であることから**飛脚**。

(2) 古文の「**ア段＋う**」(やうやう)は、「**オ段＋う**」(ようよう)に直す。

(3) 飛脚は「をれは急ぐによって、弐百文出して、かつて来たが、かやうに**おそくてはならん**」(＝おれは急いでいるので、二百文出して、急いで来たが、このように**遅くては困る**)と言っている。飛脚の心積もりとしては「いきなしにくるはづ」(＝一気に行くはずだった)だったが、実際には、「やうやうやつと茶屋までゆきけり」(＝やっと茶屋まで行った)という状態だった。

(4) □の直前の「とても急いではいるが」は、傍線部③の「随分は急ぎますれども」に当たる。□の**直後に「ので」は原因・理由を表すことに着目する**。「ので」は**原因・理由を表すことば**である。傍線部③では**「によつて」**がこれにあたる。よって、**「こなたがおもい」**の部分を現代語にすればよい。「こなた」は、ここでは飛脚を指している。かごに乗っている**「飛脚が重い」**というのが、これ以上かごかきが急げない理由である。

スーパー 超ナビ

(5) 「急ぎにこころとられ、われがかごにのること、わすれけるもおかし」（＝急ぐことにばかり心をとられ、**自分がかごに乗ることを、忘れている**のはばかばかしい）は、**飛脚**の「『そんならおりよ。』と云ひて、われも一緒に走りける」（＝**『それなら降りよう。』と言って、自分も一緒に走った**）という行為に対する、後の評判である。

【古文の内容】

飛脚が、大津で京までかごを走らせた。随分随分急いで二百文の値をつけて、一気に行くはずだったけれども、そうはいってもかごをかついでいるので、そのようにもならない。少しずつ進んでやっと茶屋まで行った。飛脚が言うには、「おれは急いでいるので、二百文出して、急いで来たが、このように遅くては困る。」と言い、しかったところ、かごをかつぐ人の言うには、「とても急いではおりますけれど、あなたが重いので（これ以上急ぐことはできません）。」と言う。「それなら、空（から）のかごなら、（もっと速く）走るか。」「もちろん。走りましょう。」と言う。「それなら降りよう。」と言って、自分も一緒に走ったとかいうことだ。

後の評判によれば、急ぐことにばかり心をとられ、自分がかごに乗ることを、忘れているのはばかばかしい。

## 国語 第1回 トリビア コラム

江戸時代には、車はもちろん電車も自転車もありませんでした。当時、走って荷物や手紙を全国各地に届けたのが飛脚です。各宿場に継飛脚が置かれていて、リレー形式でひたすら走り続けたそうです。

飛脚は、一体どれくらいの速さで走ったと思いますか？その速さは江戸から京都まで五百㎞近くある距離を六〇～八〇時間で走破するほどだったというから驚きです。

## 三 作文を書くにあたってのポイント

**①何を書くかを明確にする**

与えられたテーマについて、**自分の立場をはっきり**させましょう。賛成なのか反対なのか・どう考えるのかなど、自分が決めたひとつの立場にそって、これから書く文章に〝肉付け〟をしていきます。

**②段落の構成を考える**

あらかじめ段落の数が決められている、○段落には～を書くこと、などの**条件**がある場合もあります。**問題をよく読んで、段落を組み立てましょう。**

**③書いていくときの注意点**

言葉の意味や使い方が正しいか、**一字一句に気を配りましょう。**自信のない表現は使わずに、分かりやすく書きましょう。また、漢字や送りがなの間違いにも注意しましょう。

**④読み直しをする**

**ひと通り書き終わったら、最初から通して読んでみましょう。**読み直すことによって、文章の流れが自然かどうか、一文中の係り受けがおかしくないか、言葉の使い方や漢字が間違っていないか、などを確認できます。

**※さらにくわしい作文の書き方・作文例はこちら！** http://bit.ly/JekfSh（エル）

# スーパー超ナビ 国語 第2回

**記述問題の満点解答ポイント**

(4)の2の問いには「本文からうかがえる和平の仕事ぶりをふまえて」とある。今回のように、和平の言動からではなく、他の人の会話文からその人物像を読み取る場合もある。小説は、主人公の言動だけでなく、他の人の会話文や前書きなどにも注意をして読み進めよう。

## 一

(3) 「乾の話した〜という言葉だけが」**残ったのだから、音を聞く器官である「耳」が適する。「耳に残る」**は、聞いた音が記憶に残るという意味。

(4) 1 傍線部②の直前に「**そのやり方で裁断して**和平に持って行った時、ひどく叱られた」とある。「**そのやり方**」が和平の言う「**つまらないこと**」である。ここより前に、廣作が**龍也から布地の裁断の要領のよい方法**を教わったことが書かれている。和平の言った「つまらない」は、値打ちのないという意味。

2 乾の話から、目に見えない襖の裏に隠れている部分であっても、**手を抜かず丁寧に仕上げることを大事にしている**和平の姿勢(＝「**和平の仕事ぶり**」)がわかる。廣作が、**時間をかけずに早く布地を裁断することを優先し、仕事を丁寧に行うことをおろそかにしたこと**を、和平は見抜き、叱ったのである。

(5) 「**あの時**」という表現から、傍線部③の内容は**過去のこと**であるとわかる。本文中で過去のことが回想されているのは、「**そう言えば、二年前**龍也から布地の裁断の要領を教わったことがあった〜和平が廣作に初めて見せた憤怒の顔だった」の部分である。

(6) 菓子を持ってきた女性にとって、廣作は**客**にあたり、敬意を表すべき相手である。**尊敬語**は、**その動作をする人物に敬意を表すこと**ばである。よって、「食べる」の**尊敬語「召し上がる」**を使えばよい。「お食べになる」でもよい。「食べ(連用形)」＋「て」に置きかえられるように「召し上がっ(連用形・促音便)」＋「て」と答える。

## 二

(1) 古文の「**ア段＋う**」(まう)は、「**オ段＋う**」(もう)に直す。

(2) **日の入る所**と**洛陽**と、どちらが遠いのかという疑問に対して、子どもが『**日の出で入る所は見ゆ。洛陽はまだ見ず。されば日の出づる所は近し。洛陽は遠しと思ふ**』とまうしければ、孔子、かしこき童なりと感じ給ひけるとある。「ければ」は、已然形＋「ば」で、**理由を表す**。この答えは、「機知に富んだ」ものだと言える。

(3) 傍線部③を含む会話を手がかりにする。「孔子には、かく物問ひかくる人もなきに」(＝**孔子には、こうして意見を求める人もない**が)という部分から、孔子は**すぐれた思想家であると皆が認めている**ことがわかる。そんな孔子に対して、**子どもは率直に問いかけ、また、自分なりの答えを披露している**。そのことに対して、傍線部③のように人々は言いあったのである。

(4) 一人目の子どもは、**太陽が出始めた時**は人との距離が**近く**て、**真昼時**は**遠くなる**と言っている。その理由は、**遠くのものは小さく見えて、近くのものは大きく見えるから**である。二人目の子どもは、**太陽が出始めた時**は**遠く**て、**真昼時**は**近くなる**と言っている。その理由は、火や熱いものなどが**近い**と**きは熱くて、遠い**と**きは涼しいから**である。

# スーパー超ナビ

(5) この子どもは、「僕はお日様が出始めた時が、僕らから一番近くて」と言っているので、**近くのものは大きく見えるため**（太陽が大きく見える出始めた時が近い）と言う子どもを選ぶ。

(6) 二人の子どもが盛んに言い争っているのを見かけた孔子は、それぞれの子どもの言い分を聞く。しかし、**どちらの言い分も理にかなっており**、孔子は**どちらの子どもの意見が正しいか**決めることができなかったのである。

(7) 文章Aも、文章Bも、子どもが孔子に意見を求め、また、子ども自身が道理にかなった意見を述べていることは共通している。異なるのは、孔子の描き方である。**文章A**では、人々が、孔子を才徳のある人物であると考え、**敬意を払っている**ことがわかる。**文章B**では、子どもが、孔子のことを「誰があなたを物知りだなんて言うの」と笑っているように、**からかいの対象になっている**。

孔子

**【文章Aの内容】**

今となっては昔のことだが、唐で、孔子が、道を歩いて行かれると、八歳ほどである子どもと出会った。(その子どもが)孔子に尋ね申し上げるには、「日の入る所と洛陽とでは、どちらが遠いですか。」と。孔子がお答えになるには、「日の入る所は遠い。洛陽は近い。」と。子どもが申し上げるには、「日が出たり入ったりする所は見える。洛陽はまだ見えない。だから日が出る所は近い。洛陽は遠いと思う。」と答えたので、孔子は、聡明な子どもであるとお感じになった。

「孔子には、こうして意見を求める人もないが、このように尋ねた子どもは、ただ者ではなかったのだ。」と人々は言いあった。

# 国語 第2回

**【文章Bの内容】**

一人の子どもが言うには、「お日様が出始めた時は、大きさは車蓋(しゃがい)ぐらいだけれど、真昼時になると、お皿みたいだからね。これは遠くのものは小さく見えて、近くのものは大きく見えるためではないだろうか。」と。

もう一人の子どもが言うには、「お日様が出始めた時は、涼しい、真昼時になると、熱湯に手をつっこんだみたいだよ。これは近いものが熱くて、遠いものが涼しいためではないだろうか。」と。

孔子は決めることができなかった。二人の子どもが笑って言った。「誰があなたを物知りだなんて言うの。」と。

## トリビア コラム

**【動詞の音便(おんびん)てなぁ～に?】**

音便は、もとの音の一部が発音しやすいように変化することです。

五段活用の動詞の連用形が「て（で）」「た（だ）」などに続くときに変化します。

動詞の音便には、

イ音便(書きた→書いた)、(咲きた→咲いた)

撥音便(飛びて→飛んで)、(取りて→取って)

促音便(待ちた→待った)、(勝ちた→勝った)

などがあります。

懸命に走りた。 → 懸命に走った。

スーパー 超ナビ

# 国語 第3回

## 一

(2)「**見ると聞くとは大違い**」とは、**実際に見るのと人から聞いたのとでは大きな違いがある**という意味の慣用句。ここでは、「気をつけて頼んだはずの宿なのに不愛想な客扱いにがっかりすることもある」を表している。

(3)「たとえ」は、あとに「でも」をともなって、**逆接の仮定表現**を表す。そのため、**呼応の副詞**と呼ばれる。逆接の仮定表現は、仮定から順当に導き出される結論に反する内容が続く。

(4) 傍線部①は「**新幹線のないころの旅**」の出発時の様子で、具体的に「ガッチャンと前につんのめった」と表現されている。それとは対照的に、傍線部①の前の段落で、**ゆれもなく静かに発車する新幹線での旅の始まりの様子**が描かれている。具体的には、(新幹線の)「**座席の下から、すっと薄い板が引き抜かれるような感覚と同時に、車輪はめぐり体は前に進む**」と表現されている。

(5) 傍線部②の直前の「一時期、**外国からの団体客**が雨の箱根で～嬉々として芦ノ湖を渡って行くのに出合ったとき」に着目する。筆者は、富士山も見られない**雨天**(＝悪条件)**にもめげず**、嬉しそうに芦ノ湖を渡って行き、**旅を楽しんでいる態度**に「**旅をエンジョイするたくましさを教えられた**気がした」と述べている。

(6)「**帰心矢のごとし**」とは、「**故郷やわが家に帰りたいと思う気持ちが非常に強い**という意味。「帰心」は、はやく(家などに)帰りたいと思う気持ち。「矢のごとし」は、矢がまっすぐ速く飛ぶように、とても速いことのたとえ。

(7) 傍線部Aの直前に、旅に出て、日常から離れた時間を過ごすと、「時間と共に疲労困憊して、早く家の座布団にすわってお番茶がのみたくなってしまう」とある。それは、日常を離れると、**いつもどおりの生活が恋しくなる**ということであり、すなわち、**日常の大切さに気づく**ということ。

## 二

(1) 古文で言葉の先頭にない「**はひふへほ**」は、「**わいうえお**」に直す。

(2)「飼ひたまひて」の後に、『なに丸』『か丸』と**名を付けて**」とある。

(3) 本文3行目に、宗輔公が**蜂**に対して「なに丸」「か丸」と名付けているとある。宗輔公に呼ばれて、宗輔公の命令に従ったのは「**蜂**」。

(4)「**そのまま**」とは、宗輔公の「なに丸、某刺して来」という**命令通りに**ということ。その命令は「**恪勤者などを勘当したまひける**(侍をこらしめる)」ときに出された命令なので、**蜂に刺されたのは宗輔公に仕えていた侍**。

(5) 宗輔公が**蜂に侍を刺させた**ことや、牛車に乱れ飛んでいた蜂に「**とまれ**」**と言っておとなしくとまらせたこと**を総合的にまとめる。

スーパー 超ナビ

# 国語 第3回

【古文の内容】

総じて、蜂は短小の虫であるけれども、仁智の心を持っているといわれている。

それゆえ、京極太政大臣藤原宗輔公は、蜂を数限りなくお飼いになって、「なんとか丸」「かんとか丸」と名付けて、(それらを)お呼びになると、お召しにしたがって、侍たちをこらしめる時など、「なんとか丸、誰それを刺してこい」とおっしゃられると、その通りに(蜂は)働き回ったという。

出仕の時は、牛車の両側の物見窓の辺りを、乱れ飛んでいたのを、「とまれ。」とおしゃると、(蜂たちは)とまったという。世間では(宗輔公のことを、)「蜂飼の大臣」とお呼びしていた。不思議な徳が、おありになった方である。

## 三

(2) 鑑賞文の一つ目の A の直前に「**無原則な揺れ具合**」とある。この状態を表現した言葉である。また、二つ目の A の直前に「**このふたつの間に**」とある。このふたつとは、「新鮮なさくらんぼ」(ぴんと立っている「**茎**」)と「**ガラスの菓子器**」。よって、「**茎右往左往菓子器**」より、「**右往左往**」が入る。

「右往左往」とは、あっちへ行ったりこっちへ行ったりすること。

(3) 「**息を呑む**」は、驚いて一瞬息をとめること。「**美しい構図**」を強調した表現である。

(4) 鑑賞文の第2段落の後半から第3段落にかけて、筆者のこの句に対する感動が述べられている。「なんという無垢な**幸福感に溢れた句**」でしょう。しかもそんな句が、**わたしたちがよく目にする普通の風景と、普通のことばからできている**」とあり、これは「**日常の美**」と言える。 イ.「美しい構図」とあるので、「違和感を覚えている」は適さない。 ウ.「なんという無垢な幸福感に溢れた句でしょう」と感動しているので、「疑問を感じている」は適さない。 エ.「非日常の美として描いた」は、むしろ逆であり、適さない。

## トリビア コラム

和歌・短歌・俳句・川柳の違いをみてみましょう。

【和歌】
- 五・七・五・七・七
- 一首、二首と数える
- テーマは季節や恋愛などさまざま
- 百人一首は和歌

【短歌】
- 和歌の一種　五・七・五・七・七
- もともと和歌は、短歌・長唄・旋頭歌などの総称でした。しかし、平安時代以降、和歌以外はほとんど作られなくなったので、時代と共に和歌というと短歌のことを指すようになりました。

【俳句】
- 五・七・五
- 季語を入れる

〈季語の例〉
春…雪解け・桜・梅・遠足
夏…入道雲・夕立・茄子
秋…天の川・鰯雲・朝顔
冬…雪・餅つき・大根
- テーマは季節や自然が一般的

【川柳】
- 五・七・五
- 季語を入れる必要はない
- テーマは自由
(サラリーマン川柳など誰にでもわかり易いものが多い)

そのときそのときの情景や感動を日本語の持つ言葉の美しさを活かして、表現してみませんか。きっと、俳句・短歌の魅力にとりつかれることでしょう。

ひな祭り(春)

金魚(夏)

七夕(秋)

餅つき(冬)

スーパー
# 超ナビ

# 国語 第4回

## 一

(1) 1 「利く」は、「気が利く」「鼻が利く」「機転が利く」「ブレーキが利く」など、十分に機能を発揮する、役立つという意味。「効く」は、「薬が効く」「宣伝が効く」など、効果や働きが現れることに使う。

2 「ち じ(める)」と書かないように注意しよう。

3 種類、たぐいという意味。

(2) ア・同じような意味の漢字の組み合わせ。

イ・上の漢字が下の漢字を修飾している。

ウ・「火を着ける」のように、下から上に返って読むと意味がわかる。

エ・「日が没する」のように、上の漢字が主語で下の漢字が述語の形になっている。

(4) **資料**の「ヤバい」は、危ない、不都合である、という元の意味から広がって、「おいしい」「うれしい」「かわいい」などの意味でも使われている。これは、文章で取り上げている「微妙」に似た使われ方。つまり、**「何となく言わんとするところは伝わるし～伝わっている気持ちにはなれる」という「便利な言葉」**だということ。

(5) 流行語が「何となく言わんとするところは伝わるし、少なくとも、伝わっている気持ちにはなれる～疚(やま)しさとか痛みを感じずにすむ」という「便利な言葉」であることを認めたうえで、筆者が言いたいのは、最終段落の**「やはりこれは堕落だろう(＝本来あるべき正しい姿ではない)」「流行語を使うなら大安売りせずに(＝むやみに使うのではなく)、どうしても使わなければならない場合にかぎって口にするべきなのだ」**ということ。

## 二

(1) 最初に「有所恥」「有所鄙」［　　］と、3つの思うことを挙げ、その後、それぞれについて説明している。「有所恥」については「幼而～吾恥之(吾之を恥づ)」、「有所鄙」については「去其郷～吾鄙之(吾之を鄙(いや)しとす)」、［　　］については「与小人～吾殆之(吾之を殆(あや)ふしとす)」と説明している。このことから、［　　］には、「殆ふしとする所が有る」という内容が入る。よって、「有所恥」「有所鄙」にならって**「有所殆」**とする。

(2) 「曽無旧言」は、**書き下し文**によると、「曽(かつ)て旧言無きは」と読む。「言」から「無」に二字以上へだてて返るので、**一・二点(二字以上へだてて返る場合に使う)**を入れる。「吾鄙之」は「吾之を鄙しとす」と読む。「之」から「鄙」に一字返るので、**レ点(直前の一字に返る)**を入れる。

(3) 古語の**「故人」**は、古くからの友人、昔の友だち、旧友、亡くなった人という意味がある。ここでは、**「古くからの友人」**という意味で用いられている。

**【漢文・書き下し文の内容】**

孔子が言うことには、「私は恥ずかしいと思うことがある、卑しいと思うことがある、危険だと思うことがある。そもそも(4)若いころに学問にはげむことができず、年老いたときに人に教えることが無いのは、私は恥ずかしいことだと思う。自分の故郷をはなれて、君主に仕えて栄達し、思いがけず古くからの友人に出会ったときに、全然昔と変わらない言葉で話すことをしないのは、私は卑しいことだと思う。つまらない人物と一緒にいて、賢人と親しくなることができないのは、私は危険なことだと思う。」と。

# スーパー超ナビ

三 (1) 文節とは、文を意味のわかる範囲で区切った場合の最も小さい一区切りの言葉。切れ目には、ネ・サなどを入れることができる。文節の特徴として、次の二点を押さえておこう。

**①一文節の中には自立語は一つしかない。**

**②文節の最初は必ず自立語が来る。**

「伴奏もネ／指揮もネ／ないけれどネ／まあネ／なんとかネ／なるだろう」と区切れる。

(2) サトルの兄は集団の中に入ることが苦手なので、ホールの中で合唱を聴くことができなかった。「私」は「この人(＝サトルの兄)になにかをしてあげたいという気持ちがわいてきて」コトミとサトルに「歌うしかないなー！」と呼びかけた。**「やめれ、はずかしかけん！」と、「すこし怒ったように言った」サトルの父親の発言を「ここは無視させてもらう」ことにした。**「私」は、たとえ三人の歌声でも、目の前で**合唱を聴かせてあげたい**と思ったのだ。

(3) 最初の段落の「これまでの～お兄さんの**人生についてかんがえさせられた**～おおぜいの人が出会う様々なたのしみをこの人も受け取ることができたのだろうか？ しようがないの一言であきらめさせられてきたのではないだろうか」に着目する。「私」は、サトルの兄のために歌い、「体の奥から、音楽があふれてくるのを感じた」。つまり、**歌うことのたのしさを全身で感じている。しかし、その喜びが大きいほど、一方で、今自分が感じているような「おおぜいの人が出会う様々なたのしみ」を、おそらくは受け取ることができなかった サトルの兄のこれまでの人生を改めて思い、「今さらこんな風に胸が痛むなんて理不尽だ」と感じるほど、胸がしめつけられている。**

(4) 『「しかたなかねえ』長谷川コトミは苦笑いする」「しめつけられるように、苦しくて、涙が出そうだった。私が息を詰まらせていることに気づいて、長谷川コトミが手を握ってくれた」などから、コトミは、急に**歌うと言い出した「私」の意図を理解して合唱に参加し、「私」が息を詰まらせた気持ちに共感しながら、「私」を支え、励まそうという思い**で手を握ってくれたと考えられる。

## トリビア コラム

本来は危険や不都合な状況が予測されるさまなどを意味する「やばい」を「とても素晴らしい」という意味で使うと回答した割合が、16～19歳で91・5%、20代で79・1%に上ることが文化庁による平成26年度「国語に関する世論調査」で明らかになりました。

「私的(わたしてき)にはそう思います」という言葉遣いをしたことがあると回答した割合は、20代で47・0%と最も高くなっています。前回の平成16年度調査、前々回の11年度から年々上昇しています。

いいか悪いかの判断がつかないときに「微妙」という言い方をすることが「ある」と回答した割合は20代で97・0%と最も高いです。過去の調査結果と比べると、「ある」が「ない」を上回っていたのは、平成16年度では40代以下でしたが、平成26年では60代以下となっています。

# 国語 第4回

スーパー

# 超ナビ

# 国語 第5回

**記述問題の満点解答ポイント**

本文をよく読んで、二人の人物像が読み取れる部分に線を引くとよい。会話文の中にも地の文の中にも見つけられるだろう。小説を読むときは、登場人物の言動から、それぞれの人物の人物像を読み取りながら、物語を読み進めていくことを習慣にしたい。

## 一

(2) 「熱」「無」などの部首(れっか／れんが)と同じ。

(3) 伝染病のため家族から隔離されている光國(みつくに)を、兄は「ほぼ毎日」見舞い、「家の様子を事細かに教え」た。それは、［A］の直後の段落にあるように、「兄は病気に倒れた者の孤独をよく知っている」からだ。**兄も光國と同じ病気で闘病した経験があるので、闘病中のひとりぼっちで寂しい気持ちがよく分かる。その孤独感から弟を救うため、毎日顔を見に行っていたのだ。**

(4) 「ひどく申し訳なかった～ごめんなさい」という言葉を、兄がくれた「犬人形」には言えるのだが、兄に対しては直接言えなかった。つまり、兄の前では直接口にできないが、「犬人形」になら自分の気持ちを素直に伝えられたということ。本文2行目の「これまでになく**素直に**感心した」より抜き出す。

(5) (3)の解説を参照。そんな兄に感謝すると同時に、**「ひどく申し訳なかった～ごめんなさい」と思っている。**これらの(**感謝や謝罪**の)気持ちを兄に伝えたいが、直接口にできないので、「代わりに」――線部のように言ったということ。

(6) 光國は、兄に**強い対抗心を抱いていた**こと、兄に**素直に謝れない**ことなどから、**「負けず嫌いで幼さが残る人物」**だと言える。兄は、**弟の孤独を救おうと見舞いを続け**、弟から「稽古をしようよ」と言われると「にこりと笑って応じた。かつて、対抗心むき出しだった光國に二度と稽古はしないと言ったものの、弟の気持ちが変わったことを察し、それを**理解して受け入れた**。最後の場面にも**「優しく微笑みながらうなずいて」**という様子が描かれている。これらから、兄は**「温和で人間としての器が大きい人物」**だと言える。

## 二

(1) 『守』は決まった作法や型を守る段階」で、「決められていることを生真面目(きまじめ)に守るこの段階」でもある。また、［A］のある文の前文に、「一般的には、すべての学習は**真似から始まります**」とある。

(2) 「自分の土台をつくる」ために「素直に手本を真似る(＝「初期の段階で我慢して手本の真似を徹底的に繰り返している」)」と、「そのうちに**手本と同じようにやることの意義や手本から外れたときに生じるデメリットが理解できる**ようになります」と、傍線部①の次の文の後半部に述べられている。

(3) **「この状態(＝手本を守る意味を理解し、自分の意思で手本を守る状態)で満足してしまう人」**について、「それ以上の進歩はありません」とあり、「もったいないこと」と述べられている。これと対照的に**「作法や型を手に入れて、そこからさらに出ようと意識して行動した人**だけが進歩を続けられる」とある。つまり、**「作法や型を破る『破』の段階」**に達することができるということ。

スーパー 超ナビ

国語 第5回

(4) 「**創意工夫**」とは、考えをめぐらせて、新しい方法や手段を考え出すこと。また、その方法や手段。

(5) 「このような試行錯誤」は、第7～9段落に述べられている「作法や型を破る『破』の段階」の試行錯誤である。**第7段落に書かれている試みと、第8・9段落に書かれている試みの二つに大きく分けることができる。**解答欄の前の「従来の作法や型から出ようと意識してもっと効率的で合理的な方法を自分で探す試み」は、「基本的には、**作法や型を手に入れて、そこからさらに出ようと意識して行動**した人だけが進歩を続けられる」「決められた道から外れても～このときの行動は**より効率的で合理的な方法の創出につながる**可能性も大」などと一致しており、第7段落の試みをまとめたもの。解答欄には二つ目の試みを答えるので、第9段落の「時代の変化とともに、**周囲の条件の変化**も必ず起こっている～こうした場合は従来の作法や型をそのまま使うことに無理が生じるわけですから、**それに合わせて作法や型を変えていく**のはむしろ当然」を中心にまとめればよい。

(6) イの「初心に戻ってホテル経営を基礎から学び直す」、ウの「板前の修業を中断し、アジアやヨーロッパを放浪」、エの「伝統の味にこだわり続ける」は、「理解と経験に基づいてこれまでとは**まったく別のものを自分の力で**」生み出し、「優れた創造力の持ち主」とされる**「離」に到達した人とまではいえない。**

(7) 第7段落の5行目にある「**あてずっぽう**」という言葉が、1行前の「しっかりとした経験と根拠に基づく」と対照して用いられていること、初心者がやりがちな行動であることなどを文脈から読み取っていれば、おおよその意味を推測できる。

(8) **第1段落で「守・破・離」という教えがあることを述べ、それぞれの段階で簡単に説明している。**その後、第2～5段落で「**守**」、第6～9段落で「**破**」、第10段落で「**離**」について、**内容を一つずつ詳しく説明している。**

## トリビア コラム

『光圀伝』は、冲方丁の時代小説です。一般に時代劇「水戸黄門」として知られる水戸藩二代藩主徳川光圀の生涯を描いたものです。

皆さんは、時代劇「水戸黄門」を見たことがありますか。元になった講談(寄席・演芸の一つ)「水戸黄門漫遊記」は、徳川光圀が隠居して日本各地を巡って行った世直しを描いた創作の物語です。実際の光圀は、領内を巡検している程度で、日本各地を巡ったという記録は確認されていません。

光圀は、伝記史料において名君と賞されており、庶民の間でも知名度が高く、亡くなった時には江戸の町に「天が下 二つの宝つきはてぬ 佐渡の金山 水戸の黄門」という狂歌が広まったそうです。

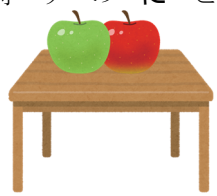
また、史実の光圀は、家臣で儒学者の佐々十竹(佐々宗淳)らを、「大日本史」編纂のために、各地へ派遣しており、佐々と安積澹泊(安積覚兵衛)の二人が、助さん・格さんのモデルと見られています。

『光圀伝』に限らず、ドラマや映画の原作を読むと、楽しさが増すと思います。先に原作を読む派と、先にドラマや映画を見る派に好みが分かれるところですね。

# スーパー超ナビ

## 一

(1) 「テーブルのうえにりんごがある」というのは「**言葉になる**」ことだ。「テーブルのうえに赤いりんごと青いりんごがある」という場合も同様である。しかし、「その赤さ、その青さがどのような赤さであり、どんな青さなのか」と問われて、言葉に窮するならば、「**言葉にならない**」ことになる。「言葉によってそれを捉えようとする試み」を続け、それが「うた(＝詩的言語)」になれば、「**言葉になる**」ことになる。「言葉になる／ならない」の境界は、「**目の前のりんごを言葉で表現できるかどうかということ**」である。



(2) 直前では「何かが『ある』という**事実は言葉になり**、それが『どのように』あるかという**有り様は言葉にならない**」と述べている。直後では「単にりんごが赤い／青いということも有り様を言い表わしている」し、「ある」という事実も言葉で伝えることが難しくなる場合があると述べている。よって、**逆接の接続詞**が適する。

(3) 傍線部②のある文の前の二文に「**既成の単語を適用するだけで済む**」のは、「**日常生活において、実用的なコミュニケーションを行う**」場合と述べ、その具体例として、「**果物屋さんの店先で、スターキングではなくゴールデンデリシャスを入手するという場面**」を挙げている。

(4) 傍線部③の直後に「**生命の必要を超える必要を人間がもった、ということに由来**します」とある。それは「**共感の次元のこと**」で、「喜びや辛さを共にすることから始まり、**感情や見方を共有することの喜びを必要としたこと**によって」、人間の言葉は、格段に大きな語彙と、「(個人の)感情や見方」を言い表せる表現力をもつ豊かで複雑なものになり、動物の言葉とは違ってきたのだ。

# 国語 第6回

**記述問題の満点解答ポイント**

「共感の次元」を具体的に述べた「喜びや辛さを共にすることから始まり、感情や見方を共有することの喜び」をそのまま書くと長過ぎる。制限字数と全体のバランスを考えて、「共感する喜び」程度に簡潔にまとめよう。

(5) エは、友達が「微妙」と言った出来事を、「分かったつもりになっている」「微妙」という言葉の意味にとらわれずに、自分が分析したという例である。「微妙」という言葉の意味を捉え直すきっかけにもなる。

(6) 「自分の感情が独特なもので、普通の表現ではそれを伝えることができないと思い、なんとかそれを伝えたいと思う気持から、**表現の工夫を試みる**、ということはたしかにあります」「その工夫を詩になぞらえるという事実は、この**実用的言語を超えた次元が芸術と親近性をもっている**ことの証拠になります」とある。そして、「**たとえ話を使ったり、妙な造語をひねり出したりする**哲学者」や、「**既存の言葉の誘惑を振り切って**、《言葉になっていないものの存在を認める》ことができたからこそ、その発見に到りえた」科学者の例をあげている。この説明にあてはまるものはウである。

スーパー 超ナビ

# 国語 第6回

二 (1) A 「帳尻」とは、収支の最終的計算。「帳尻を合わせる」とは、収入と支出が合うようにする、最終的につじつまが合うようにするという意味。ここは後者。**具体的には「大学に現役で合格し」た**ことなので、下一段活用の動詞「合わせる」の連用形「合わせ」に**過去の助動詞「た」**がついた形に書き直す。

B 「暇を持て余す」とは、暇がありすぎて、やることがなくて困るという意味。2～4行目に「あと十時間以上～することは何もない」とある。「持て余す」は五段活用の**動詞**。二つの動作・状態が並行して行われていることを表す**接続助詞「ながら」**に接続するので、**連用形「持て余し」**に書き直す。

(2) Ⅰ 1～2行目に**「やっぱり新幹線にすればよかっただろうか、**と後悔がじわじわ湧いてきた」とある。その後「おふくろさん」に「ちょっと、そこ邪魔、どいて」と言われ、「ごろごろ――という一言が耳に刺さ」り、「適当に――という一言が胸を締めつけた」。そして、Ⅰと「心から思った」。疑問形から断定になっている。

Ⅱ 「……と、うぬぼれていたのかもしれない」と続くことから、**自分の存在が両親にとって大きいもので、自分がいなくなることが両親に大きな影響を与えるだろうと考えた**と推測できる。

Ⅲ Ⅲと「ふと思った」ことが、直後の「夜行じゃなくて新幹線にしろと言った」理由に思えている。「(自分が両親にとって)**ろくな息子ではなかった**」ことが、Ⅲのように思う根拠になっている。

(3) カズユキが家にいると、「おふくろさん」がバッグにポンカンを入れるところを見られる可能性がある。おつかいを頼むなどしてカズユキを外に出すのが、こっそりポンカンをバッグに入れる確実な方法だったのだ。

(4) 「実際にその日になってみると、することはなにもない」「暇を思いきり持て余しながら」などから、**最後の一日は大事だと考えていた**が、実際に過ごしてみると**特にすることもないこと**に、当惑、失望していることがわかる。

「おふくろさんが」言った「ほんなら、お母ちゃん、ちょっとパートに出てくるけん」を「**とどめの一言**」とまで感じている。つまり、特別な一日なのに**両親に普段通りに扱われていることにがっかりしている**。

(5) 「落ち込んだまま家を出て、落ち込んだまま駅に向かい、もしかしたら両親が駅に見送りに来てくれるかもしれないという最後の希望」がなくなり、最も落ち込んだ直後、**ポンカンとそこに書かれた両親のメッセージを見て、カズユキの気持ちは劇的に変わる**。

(6) 最後の二段落の情景は、カズユキの感情の流れ、盛り上がりを象徴している。そして、**果汁が目に染みて目が潤んだような表現をしているが、本当は両親の思いが胸に染みて、感動したカズユキの涙だったと思わる**。

スーパー 超ナビ

# 国語 第7回

**記述問題の満点解答ポイント**

「あらたな共同性＝そこに生じた共同の場」について語っている「子どもと意味の世界とのあいだに成立しているといってもいいし、子どもと作者のあいだ、あるいは、子どもと言語社会とのあいだになりたっているとも言ってもいいが」の部分は繰り返しや重複が多い。最も大事な部分である「意味の世界・作者・言語社会」に着眼し、繰り返しを少なくして簡潔にまとめる。

一 (1)「生じる」は**上一段活用の動詞**。したがって「生じ／生じ／生じる／生じる／生じれ／生じろ(生じよ)」と活用する。未然形と連用形が同形だが、本文は**打ち消しの助動詞「ない」に接続**しているので、**未然形**。

(2) 傍線部②の3～4行後の「本を読むおとなの声～身をゆだねるとともに」と、□の前の「おとなが本を読むのを～楽しむだけでなく」がほぼ対応している。

(3)「まだ本の読めない幼児にとっては、**ひとに本を読んでもらうというのが、本との本来のつきあいかた**」とある。本はおとなに読んでもらうのが**当たり前だと思っていたのに、本を(自分で)読めとすすめられた幼児の驚き**を、筆者は「紙芝居を自分で読めと言われたときとおなじ困惑」と表現している。

(4) 文脈から、子どもの本との関わり方には、「読んでもらう段階」と「自分で読む段階」があって、ここはその移行期間。**前の段階には「失われた共同性」、あとの段階には「あらたな共同性」が対応している。**この段落の最初に「ひとりで本を読むという行為においては、**直接の対人的な共同性**は失われている」とある。

(5) おもにこの段落の後半部に書かれている。「あらたな共同性」とは、子どもがひとりで本にむかっているときに、**子どもと「意味の世界・作者・言語社会」それぞれとのあいだになりたつ、共同の場、共同関係**である。それは「失われた共同性＝直接の対人的な共同性」に比べると、当然**「間接的」であり、また「格段に抽象的なもの**になっている」。

(6) 第2段落で幼児期の直接的な共同性におけるおとなとのもっともゆたかなコミュニケーションが語られている。この部分は、筆者自身の体験からくる確信から、抒情(じょじょう)的な描写も見られる。しかし、筆者はこの時期と「自分で読む段階」の「新たな共同性」との、比較、対比はしても、**その優劣、正否、好悪は一切論じていない。成長に従っての後者への移行を事実、あるいは必然として、成長段階に応じて説明している。**

「ここでの(あらたな)共同の関係が、本を読むおとなとそれを聞く子どもの直接的な共同関係にくらべれば、**格段に抽象的なものになっていることはあらそえない事実なのだ**」という客観的で冷静な記述の後、**最後に結論が述べられている。**

スーパー

# 超ナビ

## 国語 第7回

二

(2) a 傍線部③の1～2行前の藤田の発言「でも、決勝まで残っても～東小とあたるから……高見にやられたら」から、高見が所属するのは**東小**だとわかる。

b 個人戦がすべて圧勝続きだったのは、高見が強いことはもちろん、彼が**誰に対しても手加減をしなかった**からだ。手加減をしないというのは、誰に対しても油断や手抜きをせず、全力で勝ちにいくということで、悪いことではない。しかし、高見には、**礼を重んじる相撲からはやや外れた荒っぽさが感じられる。**個人戦の準決勝で、藤田が土俵を割って勝負がついたのに、高見はとどめを刺すように藤田の胸を突いた。藤田は、自分の代わりに、体力的に劣る五年生が出て高見とあたり、大ケガさせられることを心配している。

(3) ねんざにもかかわらずベスト4まで残ったふーちゃんに会って健闘を称えたいと思った。しかし、足のケガの具合が「ほんとうのほんとうにヤバいのなら(＝団体戦に出られないほど悪化していたら)」その時は**ふーちゃんの代わりに出ないわけにはいかない**ということを**何となく感じている。**しかし、まだいまはそのことを考えずにいたいと思っている。

(4) 大介は「藤田から団体戦への出場を頼み込まれ」たとある。試合当日、大介は友人の買い物につき合っているので、藤田の頼みを断ったことがわかる。このような経緯を踏まえて考えよう。**藤田は「団体戦、ドクターストップだから」ということを事実として伝え、その結果起きようとしている事態を大介に説明することで、この状況を変えられるのは大介(の出場)だけだと間接的に訴えている。**それを受けた大介にとっては、傍線部②でうすうすは感じていたことが現実となったわけであり、藤田の意図は十分に理解できるだけに迷っている。直後の発言は、**藤田が口に出さずに訴え、大介が迷っていたことを、亜矢(あや)がはっきりと口に出した**という展開。

(5) **腹が減ってはいくさ(戦)はできぬ**とは、空腹では十分に活動できない、よい働きをするには、腹ごしらえが第一であるという意味。

(6) いわゆる**深呼吸**で、興奮したり腹を立てたりして自分を見失いそうだと感じた時に、気持ちを落ち着かせるために行う。大介が亜矢の「藤田くんのカタキをとって！」という発言に**反発を感じ、「うつむいて、足元の砂をつま先で蹴(け)った」後**に行った。

(7) 大介は**亜矢に思いを寄せている。**今回相撲大会に出なかったのも、亜矢の会話を立ち聞きし、自分の体型を気にし始めたからだ。裸に褌(ふんどし)という格好で、自分の太めの姿を見られるのをはずかしく感じ始めたのだ。しかし、その亜矢に、目に涙を浮かべて出るように頼まれた。**カタキをとるという目的は受け入れがたいが、それはそれとして、やはり亜矢の願いをかなえてやりたいと、出ることを決心した。**やる気でいることを示して、亜矢を安心させ、喜んでもらおうとしている。